

令和7年度 第4回「白山市ミライ会議」会議概要

※会話の順番を入れ替えたりまとめたりしています。
※制度などの説明は、会議開催時点のものです。

日 時:令和7年6月20日(金) 19:00～

場 所:美川コミュニティセンター

参加者:12名



- ◆ **各部会の他に「みかわ未来プロジェクト」を組織し、未来を担う子どもたちと一緒に空き家の活用を中心とした活動を行っています／地域活性化のため、企業との連携や国や県の補助金の活用に向けて動くなど、工夫しています**

(参加者)

各部長を中心に活発な活動していますが、それとは別に「みかわ未来プロジェクト」という組織があります。美川小学校の6年生がずっと取り組んできた空き家問題を、大人も一緒にやっということうことで立ち上げたものです。

(参加者)

みかわ未来プロジェクトは今年で3年目です。中心は空き家の「田中家」で、持ち主が「全て預けますので好きに使ってください」ということで活用を考えることから始まりました。当初持ち主は市に所有権を移してほしいという希望でしたが、安全確保のための改築費が高額で課題になっていました。

その後美川小学校の総合学習で子どもたちが活用案を出してくれて、1月29日に自作の机や

椅子でカフェを開催することとなりました。

その様子がNHKで2月4日に紹介されたことをきっかけに、東京の起業家から、美川地区全体をIP(Intellectual Property、インテlectual・プロパティ)化して文化観光コンテンツを作り、国内外に発信しようというご提案をいただきました。これに合わせて美川商工会とも連携し、美川仏壇や美川刺繍など地域の産品で新製品をつくり観光資源化する構想にもなっています。具体化は10月ごろから進む見込みで、その際には市にも関わってほしいと考えています。今後、田中家は情報発信拠点とし、それを軸に、子どもや住民にアイデアや資源を提供してもらって地域活性化を図っていく予定で、「やらないと何も生まれない、失敗してもいいからまず試してみよう」という姿勢で活動を進めているところです。採択については未決定ですが県の補助金の申請をしました。

(参加者)

美川の北前船で使われたいろいろな観光資源が豊富にあり、地元の人々はそれを大切にしていますが、発信力が弱いのが現状です。外から見ると、本当に素晴らしいもので、さらに磨けばより多くの魅力が引き出せるのではないかと思います。要するに、我々以上の発信力を持っている方々にお声掛けいただいているので、町会の役員の皆さんもそれを聞いてぜひやりたいということになり、そこから少しずつソフト面を展開しながら、ハード面も整備していきたいという段階です。

(参加者)

田中家には国土交通省の補助金も活用できるため、補助金の獲得に向けて、どのように申請すべきか動こうとしています。

また、美川小学校では6年生の取り組みが4年目に入ります。今年も空き家の活用を目的とした特別授業を実施していただけることになり、みかわ未来プロジェクトの数名が見学に行く予定です。この活動は絶やしちやいかん、継続していくことがSDGsにもつながるだろうと考えています。

(市長)

例えば、白峰では、地域の人で株式会社を作って、空き家を宿泊できるように改築したり、その他に緑のふるさと協力隊、地域おこし協力隊等いろんなものを入れながら、地域を盛り上げていこうとしています。

今のお話を聞いて、各地区で、自分たちの力でいろんなものを結集してやろうという意欲が出てきているのは大変うれしいなと思いました。子どもたちは、大人たちが本気でやってくれている姿を見ていますし、その子どもたちが将来は地域の宝になると思います。「美川まちづくり協議会」という地域コミュニティ組織をつくり上げるよさという、すごくいい話を聞かせていただいたと思います。

(参加者)

美川まちづくり協議会がなければ、こういう動きは、多分できなかつたと思います。すごくいい機会だったような気がしています。

(参加者)

みかわ未来プロジェクトの発足は、美川小学校の創立 150 周年と時期が重なり、リンクしたものになっています。私がこのプロジェクトを特に有意義だと感じているのは、子どもたちをしっかりと巻き込んでいる点です。今回の田中家の活用も基本はボトムアップで進められており、子どもたちが自らの権利をきちんと主張し、大人に自分たちの考えを伝えることから始まり、資金面や大人が担うべき部分は大人同士が連携して知恵を出し合ってフォローする——このような役割分担こそが、本来のあり方だなどと思っています。

例えば最近の PTA の議論や国の動きを見ても、大人の都合で環境変化が起き、子どもたちが結果的にそれに合わせなければならぬ場面が目立ちます。しかし、本来、子どもたちが関わる事柄については、子どもを主体に据えて考えることも必要です。特に 5、6 年生ともなれば見識も育っており、子どもたちのアイデアを実現することで自己肯定感が高まり、健全な育成にもつながるはずで、単に大人の事情だけで環境を変えるのではなく、子どもたちを巻き込みながらよりよいコミュニティの在り方を追求することが、持続可能なコミュニティづくりにつながると考えます。

ジオパーク活動では、自然や歴史に焦点が当たる部分がありますが、ジオパーク認定の際に市長も繰り返し述べているように、人々の営みや住民の気づきも含めて評価されます。その観点から見ると、美川地区の北前船文化や「はくさん3育」のうちのジオ育という観点からも、田中家は非常に有用な事例になるかなと思います。

今後の課題は、美川まちづくり協議会だけの自己満足で終わらせないことです。いかに地域住民を巻き込むかが鍵であり、広報やアナウンスの仕方が問われます。個人的には、広報活動を子どもたちに担わせるのも面白いのではないかとえています。おそらく、協議会の皆さんが尽力されている内容は地区住民の隅々まで十分に届いていないのが現状であり、そこが今後の大きな課題になっています。

- ◆ おかえり祭りのマップを作成し、日本遺産や世界ジオパークといった地域の特色を生かした賑わいづくりを進めています／近年の青年団・女性の活躍を次世代に繋げていきたいと思っています

(参加者)

みかわ賑わい部では、3 年間の活動計画を立て、1 年目は美川地区の歴史・文化・自然といった地域の特徴を中心に取り組みました。特に日本遺産や世界ジオパークという認定を前提に、メンバ

一自身が美川の歴史や文化を改めて理解することを目的にしました。北前船に関する話や、ジオパーク・エコパーク推進課の方を招いたジオの勉強会なども行いました。

その中で、美川の特徴を生かした活動ができないかということで、まずおかえり祭りに注目しました。ガイド団体の美川おかえりの会や藤塚神社の宮司さんなどにお話を伺い、市の予算をいただいて、おかえり祭りのマップを作成しました。これまでは美川青年団とおかえり祭りを守る会が手作りで地図を作っていました。地区に全戸配布できるマップを新たに作成できました。

このマップには、日本遺産やジオパークの解説に加え、祭りのルートや見どころを掲載しています。おかえり祭りは3年前から東ルートと西ルートに分けて開催しており、今年は西ルートだったため西ルートの地図を作成しました。おかげさまで大変好評で、主要駅や市の観光課にも配布し、先日は石川県立図書館へも寄贈しました。来年は東ルートの地図を作る予定ですので、引き続き市の予算のご支援をお願いしたいと考えています。

賑わい部としては、日本遺産や世界ジオパークといった地域の特徴を生かしたまちづくりを進めたいと考えています。今後はみかわ未来プロジェクトの田中家を中心に、美川全体を賑わいのあるまちにしていきたいです。また、地元の特産品であるふぐの卵巣の糠漬など、この地域にしかないものを大切に発信していきたいと思っています。白山市内で日本遺産と世界ジオパークの両方に認定されているのは美川地域だけです。今後も地元主導で、地域に根ざした特色ある活動を展開していきます。

(参加者)

私は女性として初めて青年団長を務めさせていただきました。2、3年前には、女性で初めての担ぎ手やラッパ衆といったプレーヤーとしても参加しました。それまでは女子部として、男性を支える裏方の役割が中心でしたが、プレーヤーとして初めて現場に立ったことはとても大きなことでした。

一時は美川青年団が人手不足で、5人ほどにまで減った時期もありました。しかしその後、現役はおよそ30名にまで回復し、そのうち約10名は女性でプレーヤーとして活躍しています。これはこれまでの伝統を変える大きな出来事であり、長年美川にいる皆様のご協力とご理解があって初めて実現したことだと感じています。青年団だけでなく美川地区全体が力を合わせて、おかえり祭りの形をより良いものにしてきたと思います。

手づくりでのマップ作成には非常に手間がかかっていましたが、新しいルートマップによって手作業の量は大幅に減り、裏面にはジオパークや美川の自然についての紹介も掲載しています。

私は金沢市内の高校を出ていますが、おかえり祭りを知っている人と知らない人の差が大きいと感じます。白山市民なら「おかえり祭りね」と言ってくれる方が多い一方、金沢市の方には馴染みが薄いことがありました。そこで今年は美川駅や小松駅にもマップを置かせていただいたところ、「見たよ」と声をかけてくださる方が増え、少しずつですが確実に美川のおかえり祭りや自然をアピールできている実感があります。

これからも女性の活躍や、子どもたちのラッパ衆や旗手が大人になって青年団に参加するなど、世代をつないでより良い形で発信していければと思います。今後とも皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

(参加者)

先日、みかわ未来プロジェクトの場でお話ししましたが、美川にもインバウンドの受け入れ体制や宿泊施設はあります。しかし最近、新聞でも金沢市の観光リピーターが少ないという記事を見かけたように、せっかく美川に滞在した外国の方々も、観光は金沢へ流れてしまうことが多いのです。これを何とか食い止め、「みかわ賑わい部」で美川で観光客の回遊を促すことができれば地域の活力が上がるのではないかと考えています。そうなれば雇用も生まれ、引退された方の働き場所にもつながるなど、さまざまな好循環が期待できるはずです。

◆ 管理不全の空き家が増え、防災、防犯、生活環境と多方面で心配があるので、しっかり対応してほしいです

(参加者)

空き家問題は重要課題です。子どもたちも空き家問題に取り組んでいますが、美川地区にも空き家が多く、管理不全のものが目立ってきていて、由々しき問題です。所有者が建物を撤去して上屋がなくなれば、その土地をごみ置場や昔ながらの子どもの遊び場、あるいは災害時の避難用スペースなどとして有効活用できます。建築住宅課などと連携して、空き家の適切な処理を進められれば地域はもっと良くなると考えています。

子どもたちに空き家の印象を聞くと、「気持ち悪い」「怖い」といった声が多いです。一般的に空き家は犯罪の温床になったり、放火やゴミの不法投棄、動物や昆虫が繁殖したりと多くの問題を引き起こします。特に冬場は雪かき問題が深刻で、細い路地の両側が空き家だと大雪の際に誰も雪かきをせず、通行に支障が出ます。私もそのような道を除雪したことがあります。地域住民は不利益を被っているけれども、空き家所有者は県外に住んでいるなどして管理を怠っているケースが多いです。所有しているのであればきちんと管理していただきたい。離れて暮らす所有者向けに管理を代行する業者もありますから、そうしたサービスに費用を払って委託するなどして、地域住民が被る不利益を減らしていくべきだと思います。

実際に屋根などに穴が開いたままの家も多く、大雪が降ればどうなるか心配です。輪島での大火の際に大規模に燃え広がったのは、建物が壊れて火の途切れるはずの道幅が確保されず、火がつながってしまったことが原因の一つです。美川でも他人事ではありません。防災の観点から見ても空き家の放置は好ましくないのです。空き家対策はきっちりしていただきたいと強く思います。

◆ 観光・防災に活用できる南北を繋ぐ道路があればよいと思います

(参加者)

美川からは山側へ抜ける道がほとんどなく、実際に使えるのはメイン通りだけです。各地域でジオパーク活動を頑張っている点を踏まえ、例えば白山の標高約 2,700 メートルから海拔 0 メートル

ルまでをつなぐ、ジオパーク道路、災害用道路があってもよいのではないかと考えています。点と点が線でつながることで、観光・防災双方で効果が出るはずです。

◆ **防災士会が結成され、防災訓練などを行っており、大人数が集まる避難所の運営にも対応できる体制づくりを進めていきたいと考えています**

(参加者)

今年4月から、防災士の方が安心安全部に入ってください、組織を内側から盛り上げていただいています。心強い味方になっており、大変頼もしく感じています。この動きのきっかけは、約3年前に行った防災訓練です。その際に地区の防災士を紹介しましたが、住民は当初、防災士について詳しく知らない方が多かったように思います。そこで防災士に一言お話いただく機会を設けたことが、現在の美川地区防災士会の結成につながったのではないかと思います。

防災士の会の発足は非常によかったのですが、立ち上げ直後のため予算が必要だという要望も上がっています。これまでは準備期間として進めてきましたが、正式にスタートするにあたり、今後の活動内容や必要経費を改めて検討していくことになると思います。

昨年の地震後には、珠洲市の公民館長さんをお招きして講演会を開催しました。館長さんは被災地での体験をもとに、実際の避難や指揮体制のまとめ方が非常に難しいとお話しされました。美川地区のようにスポーツセンターに何千人も集まるような規模になると、対応の単位や課題が全く異なり、取りまとめはより一層大変になることが予想されます。

問題は多岐にわたるため、今後はそうした大規模避難にも対応できる体制づくりを進めていきたいと考えています。今年10月にも防災訓練を予定しており、3年前の訓練では一次避難場所や二次避難施設の確認を行いました。そのときは、避難場所を把握している方は少ないのではないかと感じましたが、昨年10月の訓練が地震発生前に実施されていたことは、少しは役に立ったのではないかと考えています。

(市長)

防災訓練は、かなり前からやっているのですか。

(参加者)

美川まちづくり協議会としてやったのは3回です。その前は、区長会が主体でやっていました。近年は、コロナの関係で、各町内から3名出席してくださいという形でやったような時もあります。

(参加者)

今回で4回目の防災訓練になりますが、少しずつ形を変えながらやってきました。今年、10月26日に計画しているのは、総合的な防災訓練です。また、健康福祉部会で個別の避難計画の作成に取り組んでいますが、それを活用できたらというのが目標の一つです。

◆ 「隣近所、顔の見える災害支援、生活支援」を目標に、個別避難計画と個別の生活支援シートを作成しました

(参加者)

先ほど、美川まちづくり協議会の取り組みについて、住民を巻き込んだ形にしたいというお話がありました。これに関連して、健康福祉部会では、まちづくり協議会に所属する、社会福祉協議会、区長会、老人会、女性の会など、福祉に関係する団体の代表の皆さんが参加しています。

部会では「隣近所、顔の見える災害支援、生活支援」を目標に、個別避難計画と個別の生活支援シートを3年間かけて作成しました。まず1年目は、そもそもこうした仕組みが必要かどうかを話し合うことから始めました。2年目には、市が作成している支援対象リストは非公開のため、実際に支援が必要な人がどれだけいるかを把握する必要があり、全戸対象の調査日を設定してアンケート調査を実施しました。びっくりしたのですが、回収率は約70%に達しました。3年目はそのアンケート結果をもとに、個別避難計画と生活支援シートを作成し、今年度はいよいよ作成したシートを運用に移す年となりました。これらは、美川の住民が少しでも安全で安心して暮らせることを目指して作成したものです。

しかし、運用となると課題があります。例えば、災害時の声かけや手助けが必要な人に対して「誰が助けるのか」を具体的に記入する箇所や、生活支援シートで「助けを求めている人に対して近所の誰が支援するのか」を明記する部分について、実際に記入してもらうのは容易ではありません。先日、区長会で説明した際には、「そもそもその支援シートは必要か」「既に助け合いの関係ができています」といった意見がありました。また、「安易に支援してほしいというメッセージを送ることにならないか」「助けに行く側が、もし助けられなかった場合に罪悪感を持つのではないか」「支援することに縛られて自分を犠牲にしてしまうのではないか」といったご意見もあり、どれもなるほどなというものでした。支援を求めている人にどうやって対応していくかという部分も含め、いろいろなご意見をふまえ、すべてを一度に進めるのではなく、検討を重ねながら、できるところから少しずつ実行していく必要があると考えています。

(参加者)

難しい問題ですね。3年かけて進めているわけですが、基本的に区長は2年ごとに変わっています。申し送りが十分にできている町内なら問題ありませんが、ほとんど申し送りがなされていない町内では、このアンケートの趣旨がうまく伝わっていません。また、アンケートに協力した方の中にも、記入した内容がどのように使われるのか分かっていない人もいます。そこは前の区長さんからきちんと説明してもらう必要もあります。

(参加者)

このまちづくり協議会ができる前に、福祉懇談会という形で、民生委員を中心に町内会長、福祉協力員、社会福祉協議会の役員の方々と話し合いを行いました。その際、話題はいろいろ出ましたが、特に高齢化が進んでおり、65歳以上が約40%に達していることを受けて、隣近所で助けを必要としている方は具体的に何を求めているのか、という点が大きなテーマになりました。

その中では、粗大ごみが出せない、庭木や生け垣の管理が難しい、といったお声がありました。こうした問題に社会福祉協議会の枠組みで対応できないかと話し合ったのですが、なかなかそれ以上は話が進みませんでした。

ちょうどその頃にまちづくり協議会設立の話が出て、健康福祉部会が作られることになったため、これはチャンスだと考え取り上げてほしいと提案しました。実現には町内会の区長さんたちの協力が不可欠なので、両方で協議を重ねたうえで、支援を求める側と支援できる側、両方をお聞きしたのが先ほども話題となったアンケートです。能登半島地震の後で関心が高く、70%以上の方にご回答いただきました。一方で、約30%の方は高齢で記入が難しい、あるいは個人情報の提供に抵抗があるなどの理由で回答されませんでした。こうした方々への対応はこれからです。

また、福祉懇談会はその後5回ほど開催し、民生委員と区長が顔を合わせて具体的な事例について話す機会を持ちました。その過程で、情報が十分に伝わっていなかった部分や、外見では分からない困りごと(病気や助けを求めたいが声を上げられない方)があることが改めて確認できました。美川の皆さんは繋がっているのですが、その中で声が出せないことってあるんです。

アンケートでわかったこともあれば、回答には出てこなかったけれども実際には支援を必要としている方もいました。アンケートと福祉懇談会は貴重な手がかりになったと思います。今後、隣近所で助け合える地域ができればいいなと思います。

(参加者)

実際に支援を行うとなると、地域防災組織がしっかりしていることが必要で、各組織での話し合いの中で、どうやって助けるかという話題が必ず出てくるはずですが、美川地区でも、町内会レベルでしっかりした地域防災組織が整っているところはまだ少ないのが現状です。ただ救いなのは、組織が整備されている地域では、避難困難者を支援する班などの役割がきちんと項目に組み込まれている点です。こうした取り組みが各町で広がれば理想的ですし、それを支援していくのが現在の防災訓練や美川地区防災士会の役割でもあります。そのような形で貢献していければなあと考えています。

◆ 海岸清掃などの事業で地域間・世代間の交流をさらに促進していきたいと考えています

(参加者)

生涯学習部会では、地域間交流や世代間交流が大きなテーマになっています。美川地区は昔か

ら縦のつながりや横のつながりが強いのですが、「斜めのつながり」が難しいのかなと思っています。避難の時の支援や、誰がどこにどのように住んでいるのか、どう声をかけていったらいいのかといった、つながりづくりが非常に難しいと感じています。地域コミュニティ組織の中でも、この点は難しい課題なのかな。

部会でできることは限られますが、海岸清掃という事業がありますので、そこにさまざまな人が参加することで顔なじみになって、地域間や世代間の交流を促進する場になればと思います。現状では組織の活動が地域の隅々まで十分に浸透していないことが課題ですが、多くの人の参加によって住民の交流が深まればと思っています。

◆ コミュニティスクールの活動を楽しんでおり、地域の子どもたちの見守りにも繋がっています

(参加者)

コミュニティスクールの活動に関しては、コーディネーターさんから声をかけていただき、小・中学校でのミシン授業の補助やそろばんの補助などを女性の会でやらせていただいています。会員も「待ってたよ」という感じで声がかかるのを楽しみにして毎年続けて実施しています。また、地域での子どもたちの見守りに少しでも役立っているのではないかと感じています。私は安心安全部会にも所属し、防災士でもあるのですが、子どもたちに対して防災・減災の教育を積極的に進めていきたいと考えています。小さい頃からすり込むように教えると、本当に身につくものです。「すり込み」は言い方が悪いかもしれませんが、繰り返して学ぶことで確実に役立つと思うので、子どもたちに防災教室などをぜひ行いたいです。

◆ 協議会を通じ、各団体が連携して子ども向けのコラボ事業が企画されています

(参加者)

現在、さまざまな団体が美川まちづくり協議会を通じてつながっています。以前は児童館や各団体がそれぞれ子ども向け行事を企画していて、この地域では子どもが少ないため、同じ日に別のイベントが重なって参加が分散することがありました。しかし、まちづくり協議会の取り組みで、児童館とコミュニティセンターの連携、図書館とコミュニティセンターの連携といったコラボ事業の形ができ、子どもたちの取り合いがなくなってきた点が良いと感じています。

また、美川地区では「コミセン」という呼び方が定着してきました。同時期に防災コミュニティセンターもでき、コミュニティセンターやスポーツセンターなど多くの「センター」が並んで混乱していた時期がありましたが、防災コミュニティセンターは愛称「よろーさ」として定着し、住民も普通に使っています。コミュニティセンターという呼び方が広がると、他地域で説明する際に私は「公民館」と補足することもあります。今後コミセンが浸透すれば、公民館や集会所といった呼称が整理されて利用者にとって分かりやすくなるのではないかと期待しています。

◆ 美川地区の目指す姿は「歴史を紡ぎ、学びを育み、笑顔で長く住み続けられるまち」、地区への浸透に向けて活動と工夫を続けます

(参加者)

美川まちづくり協議会は令和4年3月に発足し、その際に「歴史を紡ぎ、学びを育み、笑顔で長く住み続けられるまち」を目指す姿として決めました。これを実現するために、現在は4つの部会と、美川小学校コミュニティスクールを合わせた計5つの組織で連携しながら活動しています。美川の地域柄と皆さんのご協力があってこそ、この協議会が成り立っていると感じています。

今日の話聞きながら、また自分の課題としても、美川まちづくり協議会やコミュニティセンターの活動や方針をもっと住民の皆さんに知っていただきたいなど強く感じています。現在は協議会とコミュニティセンターのホームページ、コミュニティセンターだより(月1回)、そしてまちづくり協議会の広報紙「メッセージ」を発行していますが、まだ十分ではないと思っています。魅力的な行事や活動を通じて皆さんに足を運んでいただき、参加者の口コミで広がっていくような活動も大事な、今の課題かなと思いました。

◆ 活発に活動するほど、コミュニティセンター職員の負担が大きくなっていくので対策を考えていただきたいです

(参加者)

美川地区では各部が活発に活動しています。だからこそ、コミュニティセンター職員の負担は非常に大きいと感じています。皆さんは日中仕事をしているため、会合がほとんど夜間に集中しており、本当に助かる一方で、センター長や職員の方が潰れてしまうのではないかと心配しています。市がコミュニティセンター化、地域コミュニティ組織化を進めるのは、地区全体をまとめて、さまざまな活動を地区でがんばってほしいという意図だと思います。ですから、ぜひ人員を増やすなど具体的なことを検討していただきたいです。これは切実な問題です。

我々の活動が活発になるほど、結果的にコミュニティセンターの職員に負担をかけている状況です。まちづくり協議会の共通した思いだと考えていますので、どうかその点を汲み取り、行政として考えていただければと思います。

(参加者)

最後に話は違いますが、今、開催中の大阪万博で、8月27日水曜日の石川の日の出し物に美川おかえり祭りが選出されて、美川青年団とおかえり祭りを守る会と青年団OB、藤塚神社宮司さんで参加してきます。ラッパ衆と旗手をメインに出演してきますのでご報告です。

(市長)

さまざまなご意見ありがとうございました。1番思ったのは、皆さんがたくさんの方に一生懸命取り組んでいらっしゃるからこそ、課題も出るし、自分の思いも出てくるという点です。先ほど言われていた通り、確かにそうしていくと、業務もどんどんふくらみ、大変さもあると思います。

また、目指す姿を明確にされていることで、それに向かって、皆さんがやらされているのではなく、自ら進んでやってるんだという意識が伝わってきて、大変うれしく思いました。

団結が強い町だっていう話がありましたが、お祭りをはじめ、さまざまな面で結束の強さを感じていますし、その中で新しい発想を入れながら、取り組まれていらっしゃるんだなと思います。「みかわ未来プロジェクト」という、すばらしい、持続可能な取り組みについても聞かせていただき、心強く思いました。ぜひ今後とも行政への相談も気軽に行っていただき、取り組んでいけたらなと思いますのでよろしくお願いいたします。

ちなみに、議会でも質問があったのですが、大阪万博の際には応援に行かせていただこうと思っております。

最後になりますが、皆さんは人任せではなく自分たちはこうしていこうと皆さんがお話されている姿、美川まちづくり協議会の皆さんが頑張っている姿に大変感銘を受けました。先ほどお金の話もありましたが、それはそれで現実としてありますが、またいろいろ考えながらやっていきたいと思います。